

令和 7 年度第 2 回 柏市環境審議会会議録

1 開催日時

令和 7 年 1 1 月 2 5 日（火）午後 2 時から午後 4 時まで

2 開催場所

南部クリーンセンター 3 階ホール

3 出席者

(1) 委員

青柳会長，野田副会長，愛知委員，小野委員，鈴木委員，川瀬委員，松清委員，村田委員，千田委員，藤原委員，伊藤委員，木内委員，染谷委員，富田委員（計 1 4 名）

(2) 事務局

後藤環境部長，村松環境部次長兼廃棄物政策課長，阿部環境政策課長，北村ゼロカーボンシティ推進課長，新井環境サービス課長，大部都市部次長兼公園緑地課長，寶田環境政策課主幹，村上環境政策課主査，山岡環境政策課主任，阿部環境政策課主事，武内環境政策課主事，阿竹廃棄物政策課主幹，棚田廃棄物政策課副主幹，高橋公園緑地課主幹，石川公園緑地課主幹及び小川公園緑地課主事（計 1 6 名）

4 議題

次期柏市環境基本計画の骨子案及び施策の方向性について

5 議事（要旨）

次期柏市環境基本計画の骨子案及び施策の方向性について
資料に基づき，事務局より説明。

その際に表明された主な意見は，次のとおり。

（以下，委員意見）

（愛知委員）

- ・ 子どもアンケートの結果において，中学 2 年生のイベントや環境保全活動への参加率が低い件については，多忙である等，興味を持っていても参加しない人もいると考える。中学生以上に対しては，イベント以外の開催形態を検討する方法もある。
- ・ 他分野と比べて，環境分野のイベントへの参加が明らかに少ないのか等，

広い視点での比較もあっても良いと感じた。

- ・謎解きイベント等，年齢層が高い子どもや若者に人気のイベントと結びつけること等も検討していけると思う。

⇒（事務局）

- ・中学２年生は勉強や部活動など学校生活が忙しく，本当に好きなもの以外には時間を割きづらい状況であると考え。市民団体や事業者等と連携して，小学生の頃から様々な環境イベントに参加できる状況を整備することや，教育委員会へ相談して，どのようなアプローチが有効か検討を進めていきたい。

（松清委員）

- ・環境学習について，小学生や中学生の場合，保護者の影響や学校が提供するカリキュラム等の要素が大きいと考える。
- ・リボン館（柏市リサイクルプラザリボン館）もあまり家族で訪れる場所ではない。学校のプログラムの中で，何年生でリサイクルについて学ぶのかや，小学校のうち何校がリボン館に見学に来るのか等のデータがあると良いと思った。
- ・手賀沼も，観光やイベントの場としては優れているが，そこで環境的な学びをどのように導くかといった点が課題である。学校で使用する教材に記載されていないと恐らく知り得ない。環境に関する副読本等が配布されているのか，そこで柏の環境についてどう記載されているのか，現状で資料があれば追加してほしい。

⇒（事務局）

- ・柏市の子どもが学ぶ副読本を確認し，次世代に向けた環境教育の考え方は，教育委員会と相談していきたい。
- ・手賀沼での環境体験として，小学生向けの手賀沼船上見学を実施してきたが，コロナ禍をきっかけに規模が縮小し，現在は４校程度の参加である。
- ・学校現場の先生方への負担がないよう，かつ，子どもたちが幅広く環境を学べるように努めていきたい。
- ・リボン館では市立小学校４２校中半数程度の学校の見学を受け入れている。また，リボン館の運営委員が学校に出向いて説明する機会も年間２０回弱設けている。このような機会を通じて小学生のリサイクル等への関心を高めようと努めている。

(川瀬委員)

- ・子どもアンケートの「大人になった時に柏の環境がどのようになっていたら嬉しいと思うか」に対して「水や空気がきれいである」が一番多かったことに驚いた。P F O S ・ P F O A がニュースで取り上げられたことも影響しているのかもしれない。
- ・次期計画案の基本目標「2. 自然環境」「4. 生活環境」において水循環に関する施策がある。主に手賀沼について記載されているが、水循環の構築となると、降雨や、河川排水、雨水浸透等も含めた話となるため、他の課にも広げて記載してほしい。

⇒ (事務局)

- ・アンケート結果については、手賀沼を意識して「水がきれいであること」を選んだ子どもが多いのではと考えている。
- ・水循環については、土木部門と連携していきたい。現在、河川排水部門では、都市化による雨水流出量の増大や地下水の涵養機能の低下、都市のヒートアイランド化等の防止に寄与することを目的として、宅地内雨水浸透枳等設置基準を設け、周知を図っている。

(村田委員)

- ・子どもアンケートの「ボランティアに参加したくなるきっかけ」について、学校の活動としてのボランティア活動は、きっかけとしては重要だが、結局は主体的な行動ではなく、人づくりにつながるのか疑問に思う。
- ・資料3の50ページで「ぼい捨てされたごみを拾っているといった回答が多い」とある一方、57ページでは「環境に関するイベントやボランティアへの参加率は30%未満」となっており、子どもたちが取組を実施しているのか否かよく分からない。
- ・ボランティアの推進については、学校の先生への教育も必要であるが、先生方も忙しい。町会や自治会が先導する活動等、地域での解決が図られていくと良いと思う。

(青柳会長)

- ・前提として、本資料における「ボランティア」の定義は何か。

⇒ (事務局)

- ・本資料における「ボランティア」は、団体に活動するものから個人で取り組むもの、また、学校をきっかけとしたものから自ら実施するもの等、幅広く含めている。

- ・子どもは学校生活が中心のため、学校をきっかけとしたボランティア参加が多いと考える。アンケート結果を踏まえ、親子で体験できる講座等を通じた、ボランティア活動への参加も推進していきたい。

(村田委員)

- ・ボランティアは、団体で行うものと、個人で取り組むものがある。個人の取組は、団体の活動にもつながるため重要である。市民団体活動と個人の取組は必要に応じて書き分けてほしい。

⇒ (事務局)

- ・計画書における表現は検討したい。次期環境基本計画では、一人ひとりが環境に関する知識を持ち、意識と行動を変容させることが重要であることを伝えていきたい。

(染谷委員)

- ・子どもアンケートにおいては谷津田の保全意志が70%とのことだが、子どもたちは谷津田を理解しているのか。食料難で米を確保するために谷津田で田を耕作してきた歴史を子どもたちに知ってほしい。田植え等の農業体験等を通じて、農業や食について知ってほしい。

⇒ (事務局)

- ・谷津田の保全意識が高かった要因は、子どもアンケートに挿入した谷津田を解説するコラムが考えられる。コラムでは谷津田の自然環境における大切さを伝えており、食料確保の歴史的な背景までは伝えられていない。現在、谷津田の保全は土地所有者の協力を得て進めているが、谷津田の活用、子ども向けの体験活動等は実施できていないため、今後検討したい。その活動の中で、谷津田の歴史的背景や食の地産地消についても伝えていければと考える。

(青柳会長)

- ・子どもアンケートでは、谷津田の認知度を尋ねた後に谷津田の解説コラムを挿入し、保全への協力意志を尋ねたといった順番で間違いないか。

⇒ (事務局)

- ・ご認識の通りである。

(千田委員)

- ・子どもアンケートで、環境に関するイベントに参加した理由として「おもしろそう・楽しそうだったから」が多かった点が重要であると考えます。イベントに参加した子どもに対して、実際におもしろかったのか、事後アンケート等は実施しているのか。

⇒（事務局）

- ・今回は参加へのきっかけに焦点を当てた設問のため、事後の質問はできていない。

（鈴木委員）

- ・子どもアンケートで、「谷津田を知らない」が94%であったことが衝撃であった。学校で習ったから大事という意識は持続しない。柏市で体験したから大事だと思えることが、持続性という意味でも、帰属意識という意味でも重要である。そのためには、実際に谷津田に行って歴史を学び、現在の生物多様性が保たれていることを理解してもらうことが必要である。そのようなカリキュラムはあるのか。

⇒（事務局）

- ・市内小学生等を対象に、手賀沼スクールヤードという体験型のプログラムを実施している。子どもたちが、市内の谷津田等で、田植えや収穫体験、生きもの観察等を行うプログラムである。小学校4・5年生の総合的な学習において、任意参加という形で実施しており、さらに広めていきたいと考えている。所管である経済産業部農政課とも連携して進めたい。

（木内委員）

- ・基本方針の「1. 脱炭素の実現によるリーディングコアシティを目指します」について、「リーディングコアシティ」をより魅力的な表現にできないかと思う。
- ・基本方針1と2は内容的に一緒である気もする。

（青柳会長）

- ・「リーディングコアシティ」の位置づけをきちんと示すべき。
- ・市民ワークショップの結果を読むと、柏市には、スポーツチームや大学、企業等、中核市レベルでは望めないような魅力的な要素がある。市民ワークショップでは、その活用を望む意見も出ている。それらの声を反映した計画案としてほしい。

(野田副会長)

- ・「持続可能」については丁寧な説明が必要だと思う。エネルギーについては理解できるが、農政課にも関わってもらい、農の要素も含めた方がよい。環境において農の果たす役割は大きい。
- ・柏市は都市部と農村部が両立する千葉県の縮図のような土地である。商工業、農業、環境、教育等、どのようにバランスをとっていくか計画に盛り込んでも良いと考える。谷津田は農業の後継者不足問題も盛り込んでもらえればと思う。
- ・「ボランティア」より「活動」という表記が良いのではないか。イベントに参加しなくても個人で活動すれば良い。
- ・子どもアンケートの結果からも、学校での環境教育が重要であることがうかがえる。資料3の61ページでは「行政・事業者・地域等と連携した環境教育を実施した学校」を指標としているが、学校での教育のためには、まず先生方への教育が必要である。教育委員会の教員向け研修会等を通じて、谷津田や手賀沼、湧水、農業の場を見学してもらう等、先生方に向けた取組を実施したうえで、環境教育・イベントへの参加校をカウントする必要がある。その点を加え、実効性のある計画としてほしい。

⇒ (事務局)

- ・「リーディングコアシティ」は「東葛エリアの中で柏市が全体を引っ張っていく」という趣旨であり、例えるなら柏レイソルのスローガンである「柏から世界へ」と同じ意味合いと整理している。「ウェルビーイング」は、市民が「柏に住んでいてよかった、住み続けたい」と思えるような、居心地の話と整理している。二つは一体的に取り組んでいく。
- ・第3回柏市環境審議会に完成版に近い計画書(案)をお示しする予定である。第4回環境審議会でご答申いただく計画書を基に、市民・事業者向けの概要版を作成したいと考えている。概要版はシンプルに、メッセージが伝わるような作りとしたい。
- ・農に関する記載については、農政部門で策定中の「柏市都市農業振興計画」の内容を踏まえて、農地の保全等について反映させていきたい。
- ・学校教育においては、まずは先生方のご理解が必要であるため、教育委員会と相談したい。

(松清委員)

- ・資料３の２４～２５ページについて、基本目標「１．地球環境」「２．自然環境」「３．資源循環」は全てに絡んでいるので、一体として推進していくという文言が必要ではないか。また、その他基本目標との関係性を示してはどうか。
- ・ボランティアと個人活動の書き分けについて、ボランティアは、地域や社会に対して影響を与えるものとする。対外的な活動と内発的な部分・生活スタイルの書き分けは難しいのではないか。
- ・中学生は主体的な学びの機会が大事である。市内の中学校や高校で、環境に関する部活動はどのくらいあるのか。学校のカリキュラムの中で学ぶ内容は教育である。一方で、部活動等は主体的な学びである。

（青柳会長）

- ・基本目標「４．生活環境」及び「５．環境共創」もつながっているため切り離す必要はないと考える。柔軟に、さまざまな分野がリンクして影響を及ぼし合っているイメージを示してほしい。

⇒（事務局）

- ・環境の各分野同士がつながっている点や、環境以外の分野も横連携している点について、イラストで示していきたい。
- ・学校の活動は、私立の中高で盛んである。麗澤中学・高等学校SDGs研究会は部員数が７０名以上で、フェアトレード等国際的な活動も多い。二松学舎大学附属柏中学校は、地元のNPOグループの協力を受けて活動を行っている。高校では探究の授業の中で、グループ学習のテーマに環境を選ぶ生徒がいる。その取組が他の中高生にも広がるような横展開や情報共有が必要であるとする。柏駅前にある施設「TeToTe（てとて）」で、中高生横断での取組に発展していくと良いのではないかと考えている。

（青柳会長）

- ・神奈川県計画では、施策に他の施策とのリンクを書きこんだりしているのでそのような記載も案として参考にしてほしい。

（小野委員）

- ・柏市は水とごみの問題に長く取り組んできた。地球温暖化対策も早くから意識している。その意識が出ている計画であると思う。
- ・子どもの話を出した意味をもう少し示してほしい。将来柏に戻ってくる子

どもを育てたいのか、国を担う子どもを育てたいのか。

- ・環境の価値は複雑で測るのが難しく、不確実性を含む。それらに対応するためには科学的な理解が必要である。人々の理解を育てていく環境教育こそが重要だと考えている。

⇒（事務局）

- ・柏で育つ子どもたちがふるさと柏に愛着を持ってもらえるよう、目指す環境像に向けて取り組みたい。柏に住む人、他の地へ越す人それぞれが、将来日本や世界で活躍してほしいという思いがある。未来を担う子どもたちのために環境基本計画があるという点は記載したい。
- ・環境は様々な要素が複雑に影響し合っていることから、不確実性要素までをモニタリングしていくことには限界がある。委員が仰るとおり、人々の意識や行動の変容によって少なくとも環境が良くなっていくことは間違いないので、事務局としても環境教育が重要と考えている。

（青柳会長）

- ・持続可能性の要は将来世代である。計画においては、それが子どもであるといった位置づけも可能と考える。

（野田副会長）

- ・環境基本計画の中間見直しにおいては、項目ごとの指標の達成度も議論することになると思うが、指標は慎重に検討してほしい。指標を途中で変更しても良いとは思いますが、はじめから適切な指標を設定する方が望ましい。中間見直し時のアンケート内容も、場当たりのものにならないよう、時間をかけて設計してほしい。

⇒（事務局）

- ・5年目の中間見直しの前提として、市民や事業者へのアンケートを予定している。アンケートの内容はよく検討し、必要に応じて審議会の意見も踏まえ、まとめていく予定である。
- ・環境基本計画の指標について、個別計画があるものはその代表的数値等を設定している。その他は委員の皆様の意見も参考に検討したい。

（松清委員）

- ・次期環境基本計画は小学生向けと中学生向けの冊子かPDFを作してほしい。それを学校の教材として活用してもらうことにより、中間見直し時の

アンケートにおいて、子どもたちがより深い意見を出せるようになることを考える。

- ・基本目標「５．環境共創」の重点施策「環境を学び・育む機会の推進」について、一般社会人に対する教育はどのように想定しているのか。生涯学習課、公民館、図書館等との連携も必要であると考え。生涯学習の場として市民が主体的に学べる場や、それに関する情報提供について記載がほしい。

⇒（事務局）

- ・子ども向けの計画書に関して、柏市環境基本計画の概要版は中学生にも分かりやすく作成する予定である。小学生版についてはその後検討したい。
- ・社会人に対する生涯学習については、中央公民館や生涯学習課等と相談していきたい。

（愛知委員）

- ・指標を直接的かつ具体的なものにしてほしい。
- ・基本目標「１．地球環境」の指標の１つである「公共施設の電力カーボンフリー化」は、「公共施設が提供したサービスに対するエネルギー使用量」等の方が、エネルギーの効率的利用という観点では適切ではないかと考える。また、家庭や事業所での取組を重点的に推進していくとしているのに対し、公共施設に限定して設定している点も疑問である。
- ・「カーボンフリー化」という指標は、創エネと省エネの差引の結果である。創エネと省エネを区分して、エネルギーの使用量を減らすという取組とエネルギーを創るという取組のいずれも指標とすべきと考える。
- ・基本目標「２．自然環境」の指標について、アライグマの捕獲件数と生物多様性、自然環境保全団体・事業者数と生態系ネットワークの保全は、どちらも直接的には関係がないと思う。
- ・基本目標「５．環境共創」の指標の１つである「SNSによる情報発信の回数」について、発信をしても見てもらわないと意味がないため、ビューやインプレッションの数も重要である。

⇒（事務局）

- ・指標「公共施設の電力カーボンフリー化」について、本計画の下位計画にあたる「柏市役所ゼロカーボンアクションプラン」に基づき、照明のＬＥ

D化等の省エネや、公共施設への太陽光発電設備の設置等の創エネといった要素が含まれているものとして記載している。市が一事業者として率先して取り組んでいく意味合いで、公共施設について定めている。

- ・指標としたアライグマの捕獲件数は、市が実施している特定外来生物対策事業である。生物多様性の保全と回復の施策において、毎年度進捗管理が可能な指標の設定が困難な中で、市が自ら取り組んでいるものを指標として設定しているが、間接的になっている部分はあると思う。
- ・指標の設定は引き続き検討したい。

(青柳会長)

- ・個別計画で設定されている指標を引用してはどうか。

⇒ (事務局)

- ・重点施策は、個別計画があるものはその指標を引用している。他の施策の指標についても確認し、引用可能なものは使用していきたい。

(愛知委員)

- ・市として取り組めることを指標に挙げているのは理解したが、最終的な取組の成果を調べるために、直接的な指標を掲げてもらおうと、中間評価もしやすくなるのではないかと思う。

6 傍聴者

3名

7 配付資料

(1) 次第

(2) 委員名簿

(3) 席次表

(4) 資料 1 第 1 回審議会骨子案に対する主な意見

(5) 資料 2 - 1 環境についてのアンケート（子どもアンケート）調査結果報告書（概要）

(5) 資料 2 - 2 かしわ環境ワークショップ報告書

(6) 資料 3 次期柏市環境基本計画（案）